

1P69

外遊び指向・運動習慣・運動性向の3指標による小児の身体活動量評価：男女、市部・中山間地域、肥満・非肥満による差異

木村 真司¹、福岡 理英²、花木 啓一³

¹島根大学医学・看護学系医学部臨床看護学講座

²島根大学医学・看護学系医学部地域・老年看護学講座

³鳥取大学医学部保健学科看護学専攻母性・小児家族看護学講座

【目的】

肥満の発症には身体活動量の低下が関連するが、小児期の身体活動量の評価は容易でない。今回、小児の身体活動量を①外遊び指向、②運動習慣、③運動性向の3つの指標により評価する質問紙法を考案、それらを相互に比較するとともに、男女、市部や中山間地域などの住環境、肥満・非肥満による差異について検討した。

【方法】

A県内の市部（B市）と中山間地域（C地区）の小学生6～12歳632名のうち全質問項目に回答した505名（男252名、女253名、市部293名、中山間地域212名、肥満37名、非肥満468名）を対象とした。①外遊び指向と②運動習慣は、小児版生活習慣質問紙より抽出したそれぞれ2つの質問項目の合計スコアをそれぞれ指標とした。③運動性向は、小児の身近対象物36種のイラスト画パネル（10種の運動イラスト画を含む）から任意の10種を選択させ、含まれる運動イラスト画数を運動性向スコアとした。回答は小児自身に行わせた。身長・体重の測定値と性別年齢別標準体重値より肥満度を算出、肥満度 $\geq +20\%$ を肥満群、それ以外を非肥満群とした。

【結果】

肥満度は、市部より中山間地で有意に高値だった（ $-2.8 \pm 12.2\%$ vs $+2.9 \pm 14.6\%$, $p < 0.05$ ）。1) 男女差：市部の男子は女子より、外遊び指向スコア（ 5.0 ± 1.9 vs 4.3 ± 1.7 ）と運動習慣スコア（ 6.1 ± 1.9 vs 5.2 ± 2.0 ）が有意に高値だったが、中山間地域は差がなかった。運動性向スコアは男女差がなかった。2) 地域差：市部より中山間地域で、外遊び指向スコアは有意に高値（ 4.7 ± 1.8 vs 5.3 ± 1.6 , $p < 0.01$ ）、運動習慣スコアは有意に低値（ 5.7 ± 2.0 vs 5.1 ± 1.9 , $p < 0.01$ ）を示した。運動性向スコアは地域差がなかった。3) 肥満非肥満の差：3指標は肥満・非肥満で有意差を認めなかった。4) 指標間比較：運動性向スコアは、外遊び指向スコアのみと有意な順相関を示した（ $\rho = 0.15$, $p = 0.001$ ）。

【考察】

外遊び指向、運動習慣スコアは性や住環境により差を生じたが、肥満との関連は見られなかったため、そのまま身体活動量の指標とするには慎重であるべきだ。運動性向スコアには性差や地域差は認めなかったが、外遊び指向スコアと有意な順相関を認めたことは興味深い。小児の身体活動量を適切に反映する指標について、今後の探索が必要と考えられた。